

書 評 と 紹 介

仁平 典宏著

『「ボランティア」の誕生と終焉

——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』

評者：山岡 義典

思いがけないところから剛速球に近い変化球が飛んできた。そんな作品だ。ともかく重厚、そして濃密、敢えて言えば難解。福祉・教育分野の膨大な政策文書の中から、日本社会100年の政治的・社会的底流に潜むボランティア精神の表と裏を、独自の手法で読み解いていく。新進気鋭の研究者による力作に、この正月休みはとっぷり取り組ませていただいた。

1. 何を論じたものか～

書名のキーワードから

本書は書名通り、「ボランティア」の〈誕生〉から〈終焉〉までを論じたものである。ボランティア活動そのものを論じたものではなく、「ボランティア」という言説で何が語られてきたかを論じたものだ。論じる対象の期間については、もう少し正確に言えば〈誕生〉前夜から〈終焉〉後の現在まで、ということができる。

では〈誕生〉とはいつのことか。「ささやかな誕生」として記されているのは1930年代のこと。1932年、東京市立大塚市市民館長の内

片孫一は「隣保事業に於けるヴォランチアの役割」を『社会事業』に発表、1937年には青山学院大学教授で愛隣団セツルメント総主事の谷川貞夫は「社会事業におけるヴォランティアに就いて」を『社会事業研究』に発表した。「両者とも、社会事業、特にセツルメントに関するボランティアの役割を高く評価」(p.74)した、と著者はいう。日本の「ボランティア」は、セツルメントとともに誕生したのである。

では〈終焉〉とはいつのことか。実は1990年代のことで、皮肉にも「ボランティア元年」と言われた1995年を含む年代だ。ここでボランティアが消滅したというわけでは決してない。しかし二つの意味で〈終焉〉したという。「第一に、一定の自律性をもって捉えられていた「ボランティア」の意味論的区分が融解すること、第二に、(参加型)市民社会の主導的なカテゴリーの位置から脱落すること」(p.375ゴチは著者)によって。〈誕生〉から〈終焉〉まで、約60年。

本書が読み解くのは、この60年とその前後、〈誕生〉前史の1900年代から〈終焉〉後2000年代までの100年。それをいかなる視点で論ずるのか。その視点が、副題にある〈贈与のパラドックス〉である。贈与といえば物か金を無償で提供するイメージをもつが、ボランティアという無償の役務提供も勿論、贈与に当たる。その〈パラドックス〉とは何か。その意味するところを著者の言葉から引用すると、次のようになる。

〈贈与〉とは、外部観察によって、絶えず反対贈与を「発見・暴露」される位置にある。ここで重要なのは、〈贈与〉は、被贈与者や社会から何かを奪う形

(贈与の一撃!)で反対贈与を獲得していると観察されがちなことである。(中略)〈贈与〉は、贈与どころか、相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す、つまり反贈与的なものになるというわけだ。この意味論形式を、本書では〈贈与のパラドックス〉と呼びたい。〈贈与〉表象は、〈贈与のパラドックス〉の意味論に準じた観察を不可避免的に生み出す——これは本書の中核的な仮設／仮定である。(p.13)

社会にとってプラスにと意図された贈与は、マイナスを生み出す反贈与に転化する。これが〈贈与のパラドックス〉だ。そしてこのような認識のもとで、著者は本書の課題を次のように設定する。すなわち、「近現代の「ボランティア」的なものの言説領域において、〈贈与のパラドックス〉を解決するための意味論形式はどのように変化していったのか、その中で動員という問題系とどう接続したのか」(p.14)と。少し難しい言い回しになるが、要は〈贈与のパラドックス〉は日本語で言えば「贈与の偽善性」であり、もっと平易な庶民言葉で言えば「贈与の胡散臭さ」といってよい。この偽善性や胡散臭さに対して、ボランティアという概念はいかに社会的な正当性を主張し、獲得しようとしてきたのか。あるいは、それが出来なかったのか。その100年の流れを、意味論形式(くり返し現れる語りのパターン)の微細な変化として読みとっていったのが本著なのだ。なお「その中で動員という問題系とどう接続したのか」という著者の問いについては、後で触れる。

では、その解き明かしは、いかなる視座と方法によるのか。それが本書の副題にある「知識社会学」だ。「理念史でも言説分析でも構築主義でもなく」(p.14)「弱い知識社会学」によって、と著者はいう。著者によると、知識社会学

には2つの要件がある。「(1) 知識(言説)／社会の二重体の実在を前提にし、(2) 後者が前者に影響を与えるという因果関係を措定・重視すること」(p.18)である。そして本書は、(1)は前提にするものの、(2)は消極的にしか前提にしない。故に、「弱い」知識社会学というのである。

2. 二つの民主化要件への対応の歴史として～ 内容構成から

書名の解題はこれで終わり。次に全体の構成を見ておこう。本書は3部からなる。

第1部は1900年前後から1970年まで。第1章では戦前のボランティアの「ささやかな誕生」に至る過程を、「慈善」「人道」「社会奉仕」「滅私奉公」などの言説によって分析。第2章は戦後改革から1950年代前半までを対象とし、新憲法によって保障された①国家に対する社会の自律と②国家による社会権の保障を二つの「民主化要件」と捉え、これが〈贈与のパラドックス〉回避のための基準として機能したと考える。第3章は、政治との関係性が深まる1960年までを「自発性」「自主性」「奉仕」「専門性=科学性」「運動」「参加」「助け合い」などの言説で分析。第4章は、ボランティア推進策が頻出しはじめる1970年までを、社会福祉協議会や教育関係の政策文書から読み解いていく。

第2部は閑話休題、というか踊り場。第1部の階段を上りきって一息。1960年代に誕生し、その後の日本のボランティア活動の動きに大きな役割を果たしてきた2つのボランティア推進組織の事例分析で、大阪ボランティア協会を扱った第5章と日本青年奉仕協会を扱った第6章からなる。片や「ボランティア」、片や「奉仕」。片や大阪、片や東京(全国)。片や市民から生まれたボトムアップ組織、片や国土の国家理念から生まれたトップダウン組織。思想的に

も立場的にも、また恐らくは財源的にも相異なる2つの組織であるが、ボランティア活動の現場ではお互いに出会い、交錯し、交流する。これら2つの組織に係わった人間像と言説を描き出すことで、60年代から70年代にかけてのボランティアを巡る時代的雰囲気を、生き生きと再現している。

第3部は1970年代から2000年代まで。2つの「民主化要件」への対応が変容する1970年代を分析した第7章、有償ボランティアなどの＜交換＞が実体化する1980年代を分析した第8章、そして1990年代の＜終焉＞の様相と＜終焉＞後の風景を分析した第9章。その第9章では、まず冒頭で＜終焉＞を証明する2つのグラフを提示する。一つ（図9-1）は「ボランティア」「NPO」「奉仕活動」「市民活動」「市民運動」「NGO」の言表を扱った論文の割合の推移、一つ（図9-2）は「ボランティア」「NPO」を見出しに含む朝日新聞記事数の推移（1984～2009年）。

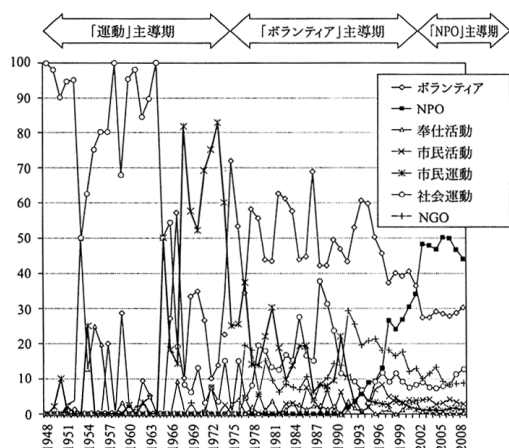


図9-1 各言表を扱った論文の割合の推移
(%, 1948～2009年)

※ 本書360頁より。

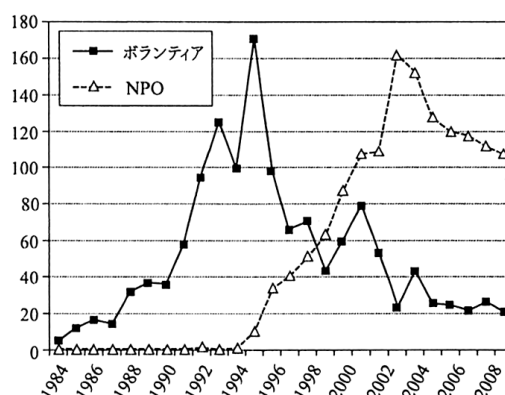


図9-2 「ボランティア」「NPO」を見出しに含む朝日新聞記事数の推移（1984～2009年）

※ 本書361頁より。

9-2では1999年になっている。「ボランティア」は「NPO」にとって代った。これが実はボランティアの＜終焉＞が意味するところなのだ。

3. 民主化要件の楕円構造と動員モデル

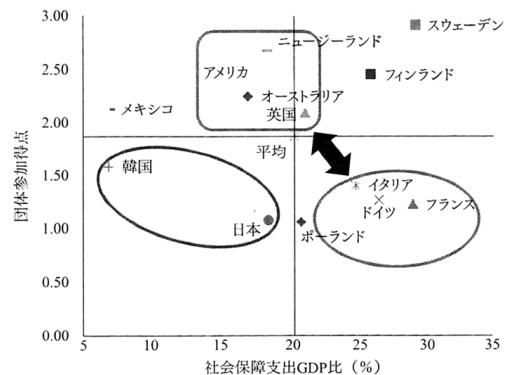
第3章以下、2部、3部を含め、その後の＜終焉＞に至るまでの社会政策やボランティア施策は、第2章で提起された2つの民主化要件にどう対応したかという評価軸で測られる。「その活動は国家から自律しているか?」、「その活動は国家が行うべき社会保障を代替してはいないか?」。この二つが共通の問となる。実は第1章も、この一連の読み解きに対するプレ民主化要件を描いたものと考えれば、その後の各章の理解を深める隠し味の役割を果たしていることがわかる。この二つの民主化要件は緊張を孕み、「一方が他方に回収されない楕円の二つの中心のような関係」(p.96)にある。「楕円」という言葉は3章以後の各章にはでてこないが、各章の記述は、この楕円の微妙な揺れ動き、その磁場の減衰過程を描きだしたものとも言える。楕円が再び登場するのは、終章である。

その前に、本書の動員モデルとの関係について

て見ておこう。先にも触れたように、著者は「その中で動員という問題系とどう接続したのか」と問うている。本書を貫くのが、この問いとの格闘だ。ここで「動員」とあるのは動員モデルの理論的枠組のことで、「ボランティア活動をマクロ的な社会レベルから観察し、本人たちの善意や思いとは裏腹に、国家の政策や資本に動員されていると診断を下す枠組の総称」(p.2)のこと。国家や資本などの敵手が、強制的であるか自発的であるかを問わず、それに奉仕するように向けるべく介入しているというボランティア批判の考えだ。しかし、この動員モデルでは説明できないことがある、と著者はいう。「第一に、もしボランティアを肯定する言説が、動員モデルの言うように「国家や資本の要請」と連動しているように観察可能だとしても、なぜそうなるのか解明できない」(p.2)し、「第二に、動員モデルは、「ボランティア」という言葉の増殖を説明できても、縮小は説明できない」(p.3)。そこで「ここには、「ボランティア」という言葉を生み、増やし、そして棄却していく、別の《力》が関与しているといえないだろうか」(p.3)と問い、「その意味論に内在しながらそれを変容させていく「力」を顕在化させる」ことを目指す。本書の各章は、そのような力を動員モデルに依拠しないで顕在化させる格闘の成果だったのである。そしてその格闘を経た上で、終章において動員モデルを再考し、次のように言う。

「全ての動員は悪い」と総称的に論じるより、その動員が何と接続しているのかを個別に精査／評価する方が、有意義だということである。文脈抜きの動員批判は、文脈抜きの協働擁護と同じぐらい認識利得が小さい。(p.424)

この点は私も全く賛成だ。その上で、社会保障支出と団体参加得点の国別国際比較(図終-



図終-2 社会保障支出割合と団体参加得点
※ 本書425頁より。

2)を参照し、必ずしも社会保障支出と参加得点が負の相関を描くとは限らないことを示した上で、社会権は政府の責任で保障しつつ実際の活動は市民社会や非営利組織が自律的かつ柔軟に担うオランダ・モデルを紹介し、「供給／ファイナンス分離モデル」等と呼ばれるこの類型も、二つの民主化要件が緊張関係をもって形作る楕円構造を内に備えたもの」(p.425)と言い切る。「ただし、楕円は単数でないことに注意が必要」で、「楕円はサブシステムごとに複数化するだけでなく、空間のスケールに応じて複数化する」から「今後はセクター間だけでなく、楕円相互の関係を考える知が不可欠になるだろう」と予見する(p.426)。

この民主化要件の楕円の再構築と複数化によって、動員モデルは限定的に解除される。しかしこの楕円は、本著によっては必ずしも論理的に精緻にモデル化されているわけではない。イメージの域をでていない。これから構築すべき未完の楕円なのだ。

本書発刊の2週後、3月11日に東日本大震災が発生した。広大な地域に未曾有の凄惨な被害をもたらした。ボランティアに限らず寄付や物資など、多くの「民間支援」＝＜贈与＞が日本

社会に沸き起こり、溢れた。この状況の中で、我々の生き方に関する根源的な問いが発せられ、社会のありようについて様々な言説が生まれつつある。すでに減衰した楕円の磁場を再構築する日が、これからの生活再建や地域復興の過程で、きっと来るかもしれない。そのとき、この著作は真の予見の書として改めて再評価されるだろう。期せずして、3.11後を読み解く

上での、貴重な文献になったのである。

(仁平典宏著『「ボランティア」の誕生と終焉—〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』名古屋大学出版会、2011年2月、496+x頁、定価6,600円+税)

(やまおか・よしのり 元法政大学現代福祉学部教授)

本書の内容

序章

第一部 農民運動全国指導部の動静

第一章 労農派と戦前・戦後農民運動

第二章 全農全会派の解体

——総本部復帰運動と共産党多数派結成

第三章 大日本農民組合の結成と社会大衆党

——農民運動指導者の戦時下の動静

第四章 旧全農全会派指導者の戦中・戦後

第五章 日本農民組合の再建と社会党・共産党

第二部 農民運動指導者の戦中・戦後

第六章 杉山元治郎の公職追放

——「農民の父」杉山元治郎の戦中・戦後

第七章 三宅正一の戦中・戦後

第八章 平野力三の戦中・戦後

——農民運動「右派」指導者の軌跡

終章 総括と今後の課題

●農民運動指導者の戦中・戦後
法政大学大原社会問題研究所叢書

農民運動指導者の戦中・戦後

——杉山元治郎・平野力三と労農派

A5判・四四〇頁
八八二〇円(税別)

横関 至 著

日本農民組合の創設者・杉山元治郎と、戦前・戦中・戦後と「反共」を掲げた農民運動の指導者・平野力三については、「聖者」という杉山像と反共主義者であり右派指導者であり分裂主義者であるという平野力三像が形成されてきた。本書では、二人の実像と労農派の農民運動への関わりを検証する。

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>